

"今後の生き方"と運動の役割

「小さな親切」運動は来年、発足より60周年を迎えます。本誌では、特別企画として、各界の著名人にインタビューを行い、今後の運動展開についてアドバイスをいただきます。第一回目は、評論家としてもご活躍の寺島実郎氏。寺島氏が学長をつとめる多摩大学は、大都市郊外の高齢化問題を解決する様々な取り組みをされており、昨年「小さな親切」実行章を受章しました。(贈呈の様子は前号・新春号に掲載) 寺島氏から見た「小さな親切」運動の真価を、さまざまな角度から語っていただきました。

人間が人間たる所以は「共感力」

今、私が会長をつとめている、(一財)日本総合研究所の初代理事長が茅誠司さんだったこともあり、「小さな親切」運動は昔から知っていました。1963(昭和38)年の運動発足当時、私は高校生になる頃でしたが、東京大学卒業式での茅総長の言葉は、今も耳に残っています。東大の卒業生に対して、子どもに語りかけるように「小さな親切」をしよう、というメッセージを送ったことに驚きを感じたのです。しかし、茅総長がすべてを見抜かれていたことが、今ではよくわかります。当時は

安保闘争が終わり、経済の時代へ突入した時期。その時、茅総長なりの直感で、今後経済主義だけでは日本の未来は明るくない、と気づかれたのでしょうか。周りにいる人たちへの心配り、それが等身大の人間には大切で、人間社会を生きていくための基本であるということ、を、「小さな親切」という極めて簡潔な言葉で伝えたのです。私が、この運動に取り組む皆さんに声を大にして申し上げたいのは、人間の人間たる所以は「共感力」だということです。周囲の人が喜んだり、悲しんだりしているときに、同じ感情を共有できる能力です。「小さな親切」運動はまさに、その「共感力」を育む取り組みなのです。

寺島実郎

[てらしま・じつろう]

1947年北海道生まれ・早稲田大学大学院政治学研究所卒/多摩大学 学長/一般財団法人日本総合研究所 会長/一般社団法人寺島文庫 代表理事



動物にもAIにもない人間の特性とは

先日、京都大学前総長の山極壽一先生とご一緒する機会がありました。先生は日本を代表する人類学者ですが、人間は確かに進化してきたけれど、動物に劣っている面もたくさんある、という話をされていました。

チンパンジーは、人間よりはるかに早く正確に画像を認識するそうです。人間より速く走れる動物もたくさんいます。それでも、人間には大きな強みがあります。それは巧みに社会を形成し、次世代を教育することです。子育てをする動物はいませんが、親以外の存在、例えば祖父母や周りの大人が子どもの育成に関わるのは、人間だけの特性です。

そして、人間はAI(人工知能)とも比較されます。確かに認識力、目的に対して手段を選択していく能力についていえば、人間はAIにかないません。囲碁でも将棋でも、ディープラーニングが進んだ現在では、AIははるかに優秀なことは皆さんもご存知でしょう。ところが、いかにAIが一億手先、十億手先を即座に読んだとしても、まねのできない芸当が人間にはあるのです。

それは「美意識」。人間は目的手段の合理性のみで動くではありません。自分の得にはならなくても、自分の「美意識」に

没落した日本を復活させる次の一手

従って行動することがあるでしょう。友情であったり、愛情であったり、思いやりであったり……。 おぼれた人を見れば、後先考えずに水に飛び込んでいることもありますね。動物にもAIにもないこれらの特性が、社会を創る原動力になっているのです。

以前、私が海外に行くと、「日本はすごいね」とよく言われました。それは戦後復興からの経済の隆盛と、それを支えた技術に対する賛辞でした。1994(平成6)年には、日本は世界のGDP(国内総生産)の17.9%を占めるまでになりました。

それが、昨年はわずか5.7%です。そこへ新型コロナウイルスが襲いかかり、ワクチンも自前で作れないという状況です。国産ジェット機開発も凍結になり、日本の技術力も地に墮ちた感があります。

大げさではなく、第三の敗戦に近い状態で、国の基盤となるのは「人的資源」しかないと考えます。私が教育に重きを置くのもそのためです。この先の日本を支える人間を、どうやって育てていくか。近道として、二つあげます。

一つ目は、今の自分や日本の立ち位置を知ることです。そのためには海外に出て、学んでほしいのです。幕末期の志士や終戦



後の起業家たちのように、世界を見てきてほしいと思います。特にこれからは、アジアです。アジアの熱気、アジアダイナミズムを肌で感じてほしいと思います。それによって見えてくる道が必ずあります。

二つ目は、会社人間、大企業病からの脱却です。会社を辞めて20年経っても「私は(株)○○○で営業部長でした」じゃ寂しいではないですか。今は、入社3年で会社を辞める人が3割いるそうですが、大いにけっこうだと思います。その3年間は無駄ではありません。知識を得て、自分の適性を知り、問題意識も芽生えているでしょう。確実に賢くなっているのです。

会社という小さな組織にいればいるほど、どんどん井の中の蛙になってしまい、世界の動きから遠ざかってしまいます。第一、ミスマッチと知りながら、組織に残るのでは、組織に貢献することすらできませんからね。

親切運動が「心のレジリエンス」を鍛える

最後に「心のレジリエンス」について話します。レジリエンスとは、「耐久性・回復力」という意味ですが、今の日本は新型コロナウイルスの影響もあって、多くの人が心にボディブローを受けています。ストレスも多いでしょう。会社だけ、家庭だけ、というように住んでいる世界が狭けれ

ば狭いほど、心の耐久性が無くなっていきます。

「小さな親切」運動は、「心のレジリエンス」の強化にも役立つ貴重なプラットフォームであると思います。企業や組織に所属し、家族を養うための仕事のほかに、もう一つ生きるための軸があった方が良いでしょう。

これからは、「一人ひとつのNPO」です。活動内容は地球環境でもいいし、地域の子どもたちのケアでもいいし、そこから得る情報や刺激、共感力は、シナジー効果を伴って「心のレジリエンス」を鍛えます。その効果を親切運動に携わる皆さんは、もうお気づきかもしれません。

「小さな親切」運動は、今後の日本を支え、人間の生き方やあり方に奥行きを持たせる活動です。皆さん自身のためにもなるこの運動を、楽しみながら続けてほしいと願っています。



60周年特別インタビュー「小さな親切」運動のこれから

"今後の生き方"と運動の役割

本誌に掲載できなかったお話を含めて、Webサイトに公開中！ぜひお読みください。
<https://www.kindness.jp>



「安保闘争」と茅誠司総長の想い

寺島氏がインタビューで触れている通り、1963年、東大の卒業告辞で、茅誠司総長が「小さな親切」の実践を呼びかけたことを機に、親切運動は発足しました。当時は、池田勇人内閣の「所得倍増計画」発表から3年。学生運動が下火となり、高度経済成長へと進む中、日本人の価値観が大きく変化した時代です。

安保闘争は、1959年から1960年、そして1970年の2度にわたって起こった、「日米安全保障条約(安保条約)」の改正に反対した大規模なデモ活動で、「60年安保」「70年安保」とも呼ばれます。

第二次世界大戦に敗戦しアメリカに占領されていた日本は、1951年、サンフランシスコ講和条約で独立が認められましたが、憲法第9条によって戦力を放棄したため、アメリカが日本の安全を保障する「日米安全保障条約」を同時に締結しました。

これにより、米軍は引き続き、日本国内に基地を置くことができるようになりました。しかし、日本が外国から攻撃を受けた際、「アメリカが必ず助ける」とは明記されていないなど、不平等に近い内容だったため、岸信介首相は就任当初より、これを対等な条約に改正しようと交渉を開始。

1960年に「新安保条約」を締結しますが、日本はアメリカの軍事行動に巻き込まれ、軍国主義に逆戻りするのではないか、

などの声が上がリ、各地で反対運動が起きました。同年5月、衆議院特別委員会での採決阻止のため、座り込みをした議員を警衛隊が排除し、新安保条約が強行採決されたのをきっかけに、「安保闘争」の嵐が一気に吹き荒れ、各地で大規模なデモや抗議集会が開かれました。

反対運動は学生組織にも広がり、6月には東大生の**樺美智子**さんが国会議事堂前で行われたデモで、機動隊ともみ合う中亡くなるという痛ましい事件が起きます。

茅誠司氏は当時、東大総長として、学生と話し合いの場を何度も持っていました。そんな中、樺さんが命を落としたことを知り、誰よりも嘆いたのが茅総長でした。イデオロギーの対立は、解決にはつながらず、怒りや憎悪を増長するばかり。茅総長は親切や思いやりが満ち溢れる社会をつくるのが、若者たちが望む未来につながると考えました。

東大の卒業告辞で、「小さな親切」の実行を学生たちに呼びかけた背景には、茅総長の樺さんの死に対する深い後悔、無念の想いもあったのです。

